

○昭和三十八年度學部卒業論文要旨

李 贄

—「焚書」を中心として見たその生涯と思想—

細 矢 和 夫

明末の特異な思想家、李贄（卓吾）について、彼の著「焚書」を手がかりにして説明しようと試みた。

李贄には「藏書」、「說書」をはじめとして、實に多くの著作があるが、その中でも「焚書」は李贄研究に缺かすことのできない重要な基礎的資料である。それは、彼が折にふれて記した書簡、雜文、詩等を、ほぼ全生涯にわたつて收録した、いわば雜文集である。したがつてそれは體系的内容を持つものではないが、それだけに彼の思想の全領域に及んでゐるし、また書簡の中に見られる消息は、彼の傳記的研究に缺くことのできない資料となつてゐる。

彼は嘉靖六年（一五二七）、福建省泉州に生まれた。二六才で鄉試に及第してから、共城、北京、南京等で、縣學や國子監の教官をはじめ下級の微職をいくつか務め、五四才、雲南省姚安府の太守を最後に官を辭した。この間、彼は至る所で、ことごとく上司と對立をおこしている。それは虚飾と偽善に被われた當時の官僚に對する、彼の潔癖にして獨介な性格から出た反抗であつた。口では道を説く彼等の、その實、腐敗し、墮落しきつた姿を見せつけられた李贄が、

「不信道、不信仙釋。故見道人則惡、見僧則惡、見道學先生則尤惡。」（王陽明先生道學鈔）という心境に至つたのはうなづける所である。しかし、こ

うした彼も北京で禮務司部にあつた頃、友人のすすめで王陽明、王龍溪、王心齋等の說を知り、ここに自分の學問を見出したのであつた。辭官の後は、湖北省の黃安、さらに麻城に住み、同學と交わり、讀書と著述に明け暮れる生活に入つた。やがてその舊道德に對する忌憚ない批判活動は、搢紳等の憎しみを買い、晩年の十年餘は、彼等の迫害をのがれて各地を轉轉した。しかし萬曆二〇年（一六〇二）、遂に逮捕投獄され、獄中で自殺するという悲劇的最期をとげたのである。

李贄の生きた嘉靖・萬曆時代は、政治的にはまぎれもなく衰退と混沌の時代であつたが、一方において商業經濟の發展にともない、新しい都市が勃興し、獨白のエネルギーが發生した時代でもあつた。したがつてそこには、自然、一種のアーナーキーな自由主義的精神の高揚が感じられる。彼の思想はこうした風潮の中で形成されてゐたのである。

「焚書」の中で最も多く目につくのは、當時の儒家、あるいは儒家的士大夫に對する批判の言葉である。李贄は、彼等のよつて立つ傳統的思考形式はもはや精彩を失ひ、硬化しており、何ら現實的有效性を持たないと考えたのみならず、李贄にとつて彼等の説く道德は、實は單に彼等の專制國家における官僚としての、封建地主とし

ての、特權の利益を擁護するための口實に過ぎなかつた。かくして彼は名教にはもはや何らの價値のないこと、人はすべてこうした名教の規範より解放されるべきであることを力説した。この主張の根底には王心齋らの心學を繼承した、あるがままの自然な人間性にたいする絶對の信頼があつた。彼はこれを「童心」と稱したが、それは人間の情的、本能的側面への眞直ぐな肯定であつた。そしてこれらに對する從來からの他律的規範は、すべて人間を冒瀆するものとして否定された。「夫天生一人、自有一人用、不待取給於孔子而後足也。若必待取足於孔子、則千古以前無孔子、終不得爲人乎？」（（焚書一））という言葉は、こうした彼の思想を最も端的に示すものである。このいわば、反道學と人間解放の精神は、李贄思想の核であり、その獨自な社會批判、歴史評論、文學批評もすべてこの精神によつて貫かれてゐる。

しかしながら、彼の思想は複雑なものがあつた、こうした現實尊重の合理主義では割り切れないものがある。いわゆる三教思想がそれである。儒佛道の三教は各々學ぶべきものがあるとし、この三つを統一的に捉えようとする試みの中には、儒教の絶對性に對する批判が含まれてゐるし、また當時の佛教には宦官の專横に抗議して立ち上るという政治的積極性との結びつきもあるが、しかし、その論調は全體に、きわめて超自然的であり、神秘主義的であつて、一切を「空」や「無」に歸する考え方が積極的現實主義に矛盾するものであることは否めない。それは、その時代及び中國的精神風土から来るさけない限界であつたと云わなければならぬ。

最後に、思想的系譜の中に占める李贄の位置を考えて見たのであるが、これを結論的に云えば、陽明に發し、心齋らの泰州學派に

おいて高まりを見せた心學運動の頂點に立つ思想家であつたということになる。彼の思想は矛盾もあり、限界もあつたが、しかし總體的に、その近代的な批判的思維は高く評價すべきものであることは疑いえない。

墨家について

小 出 貫 暎

「義を言いて行はざるは、是れ明を犯すなり。」（魯問篇）

墨家思想の創始者、墨子の右の言はその思想を端的に表現している。墨子は春秋戰國の時代に於て、單に偉大な理論家であつたといふだけでなく、それ以上に偉大な實踐家でもあつた。

自分の體を粉にしても社會の安寧を願つて行動し續けた人物であつた。それだけに社會狀勢をよく理解し、民心を的確に捉える智に長けていた人物でもあつた。尙同篇の中で、民が始めて生じた時には、各自、義を異にして自分の義を是として他人の義とするところを非としていた、と述べてゐる。然しながら人には染化性のあることを察知し、この性質を利用し、社會に共通する義を打ち立てたのである。その義の源が、中國古來から人々の信仰の的であつた天であつたのである。

またその思想を展開するに當つて、擇務主義を取つたことも墨子の實踐示の一面を表わしてゐる。以下、卒業論文の結びの部分を掲げることとする。

墨家思想は、從來の天の觀念（特に堯舜禹時代の）を大きく取り

入れながらも、單にそれを踏襲するに止まらないで、かなりそれに修正を加え、天志をその思想の主柱としていえると言へる。

そしてその天は義を欲し、兼ねて相愛し交々相利することを望んでいる主宰的倫理的な性質を有している。これは、墨家が天下萬民の利を第一目的とすれば、天がそのような性質を有していると規定するのは當然であつた。また言い方をかえれば、天下萬民の利を目的とする墨家思想を一層權威づける爲に天を出し、その天に墨家の教説を語つてもらおうとした、とも言えると思う。また墨家思想の代辯者として聖王を持ち出しているのもその特徴である。

尙賢以下の諸要素もこのように規定された天志に全て適うものとして打ち出されてきたものである。であるから、諸要素の間には個々の繋がりがあると同時に、全て天志に通じていると言ふことができる。

墨家思想が、今までみてきたように、大半が合理的なものであるのにも拘わらず、その主柱となつてゐるのは非合理的と思われる天であることは一見矛盾するようであるが、しかし天の信仰は、當時にあつては一般の人々の心に根強く廣まつてゐたことを思えば、これを否定し去ることは、その思想を死文化するのも同然であつた。天について多くは語つていない孔子も、天を否定するようなことは決してしなかつたのは、論語を見ても明らかである。墨子が、却つてその信仰を自分の教説の主柱に引き入れることによつて、その思想を展開するのが有利なものと見たのは、明察と言わねばならない。

また、墨家思想は、教書としては王公大人士君子に呼びかけている形式をとつてゐるが、文盲の人民に向つても、かなり積極的に行精神を以て働きかけたであらうことが、想像されるのである。そ

して諸子百家の中でも、最も一般人民の立場に近い所で、自家の思想を展開しているように、思われるのである。

墨家思想は既に見てきたように、混亂の是正策が主であるから、平安時に於てはそのまま取り入れることは出来ないかも知れないが、人民の生活の安寧を願い、力行精神を植えつづけようとしたその積極的態度は、いつの世にあつても忘れてはならないことである。

魯迅文學研究

——「呐喊」作品論

根本正紀

ぼくは卒業論文・魯迅文學研究——「呐喊」作品論——を次のようなスタイルでまとめた。

序 本論

一、「呐喊」について

(一) 魯迅の勞作

(二) 「呐喊」の位置

(三) 魯迅の寂寞と「呐喊」について

(四) 「呐喊」への語りかけ

二、「呐喊」作品論

(一) 「狂人日記」について

(二) 「孔乙己」について

(三) 「藥」について

(四) 「明天」について

- (五) 「一件小事」について
- (六) 「頭髮的故事」について
- (七) 「風波」について
- (八) 「故郷」について
- (九) 「阿Q正傳」について
- (十) 「端午節」について
- (十一) 「白光」について
- (十二) 「兔和猫」について
- (十三) 「鴨的喜劇」について
- (十四) 「社戲」について

結び——文學者魯迅

參考資料

あとがき

一

ぼくは魯迅文學の本質を、彼の言葉によれば、——寂寞——との内的葛藤と考えている。——寂寞——の意識が魯迅に彼自身の根底的態度を据えつけ、文學者魯迅を可能にしている、と同時に、それがぬぐいきれぬ魯迅自身の不在の意識を形成しているのだ。そのほとんど決定的な二律背反的矛盾の中に漂うのが魯迅である。魯迅の存在であり、現われとしての作品である。

魯迅が小説において主題としたのは、中國社會の病態暴露であり、それによつて人に覺醒を與え、中國・民族の改造を促そうとしたのである。魯迅は小説によつて、舊社會及びその中の腐敗、墮落、虛偽等々をえぐりだし、類型をとりあげて一つの典型を創造することによつて、その目的を果そうとする、この試みはいわば彼自身の寂

寞的な状況との戦い、という暗いトンネルを抜けた向うの、「明るい廣場」のイメージによつて支えられているものであつて、確實さのもたらすひかりが魯迅に與えられていることなのだ。文學への姿勢の確立は、魯迅が彼の奥深くに疼く寂寞(的状況)を變化させて手に入れたものではない。彼が手に入れた確實な姿勢というのは、彼の寂寞というほとんど宿命的なものと同化することによつて、つまり與えられた「自己」のすべてを自分に引きうけようとする自己肯定によつて、生みだされる。

彼の本質的な部分で、寂寞と文學と中國は深く結び付いているのである。

二

魯迅は感覺的な文學者であると思う。

魯迅は對象を感覺でとらえ、とらえた對象を自己の裡で反趨し、ふたたび感覺的にとりだし、作品化してゆくという形をとっている。そういうた形をとることは、イメージによる小説の世界構築を目指すことになる。だが、イメージとはそれ自體自己完結的なものである。それを有機的に結合し、多様なものの統一を目指し、ひとつの小説の流れを醸成するためには、廣範なる概念による思考形態、あるいは體系的思想が要請される。が、魯迅にあつては、それがない。ここに、魯迅が長編小説を書けなかつた理由があると考えられる。さらにまた、「呐喊」の諸作品に共通して感じられる主題と内的文學衝動との無殘な斷絶、ということが、彼の苦痛に至む寂寞、及び寂寞との内的葛藤と、併せ考えることによつて、納得されるのである。

魯迅が感覺的であるということと相俟つて、彼の裡に確在するサ

王 充 研 究

——その命論・性論を中心として

デイズムの眼差しである。「孔乙己」「阿Q正傳」「白光」等に、さらに飛躍した言い方をすれば、彼の全作品に見られるこの眼差しは、氣質的なものよりも、彼のそれまでの人生によつてもたらされた苦澁から生じてきたと考えられる魯迅の裡の、惡魔の蕁笑いである。

加 治 信 之

次に、彼がよく農村を描くのに成功し、抒情的なものほど成功し、それと對立するもの、つまり、都市を描くのに失敗していると言われる。その理由は、彼の苦痛なる人生の展開される前の、**△宏大なる共生感▽**を覚え、たとえイノセントにはあろうとも、全人間的にみずみずしく生きた記憶の時期は、十二歳までの農村によつて代表される。とすれば、文學作品としての統一性を、豊かな人間的情感を、盛り上げるためには、作者の小説の場を農村に設定しなければならぬ。そこにおいて初めて、作品世界の構築が許される。都市は十三歳以降の、魯迅の苦痛の人生の記憶と共に浮かび上つてくる。魯迅は自己の人生を一途に生きなければならぬため、彼自身

近來**△論衡▽**に對する評價は、その批判精神と唯物論的方法とによつて位置づけられた。實にこの二點が否定されなかり今日的王充に對する評價は不動のものと言ふことができる。

しかるに私は、**△論衡▽**の全てが、それらの評價の上で完全に統合し得たとは謂えないと考える。即ち今日の評價が、彼の「異端的批判思想」と「唯物論思想」の上に問題を置く時、必然的にそれらの問題の弱點としてとり殘される存在に目を向けなければならぬのである、而してそれらの弱點とされるものの内で、特にその位置が顯著な存在が「命定論」なのである。

がそのように志向したことをも含めて、人生に近接しており、餘裕がない。ために、我慢できないと憤然として去るか、そつぽを向くか、沈黙するか、あるいは隠れてしまう。ここに肯定と否定を共に含んだ魯迅の一つの態度がある。

三

魯迅は、作品化することで果し得なかつたさまざまな課題を、自己救済と中國救済の重ね合わされたイメージの許にひつさげて、それ以後の人生を、誠實に歩まなければならぬのだ。

——誠實な文學者・魯迅

この言葉が多くの卒業論文の結語である。

△論衡▽各篇成立の根元は王充自ら述べる如く、「銓輕重之言、立眞僞之平」**△對作篇▽**であり、「實事察妄」**△對作・自紀篇▽**を目的とするものであつた。而して王充はまた自らその態度を「論衡・政務、可謂作者、非曰作也、亦非述也。論也。論者、述之次也」**△對作篇▽**と表明し、「論ずる」中に目的と方法を封じ込んだのである。實に**△論衡▽**の全篇をおおう批判の態度はここによつて彼の目的であると同時に方法であることが理解される。しかるに、批判がなされる根底には、當然それを支える統一的理念が存しなければならぬ。特に王充の如き烈しい反體制への批判にあわせて、自らの立場を「反正宗思想」の上に確立させたことは、その統一的理念の存在を否定し去ることをゆるさないものである。この王充の批判

を支える根底の統一理念とは何か。

すでに述べた如く、王充が目的とした方法となしたものは「論ずる」ことにあつた、而して我々が彼の根底思想をうかがわんとする時、この「論ずる」過程を離れて理解することはできない。かく見る時、先に王充の合理論として想定された「唯物論」及びその弱點と目された「命定論」は、この「論ずる」位置にあつて、共に王充の根底理念を表示するものと考えられるのである。即ちこの「論ずる」とは、とりもなおさず王充の批判を示すものであれば、その批判より成立した二者は、同時に彼の批判の態度の内に抱括されなければならないのである。

従來の「命定論」の考察は、多くこの點に於て、歴史的、社會的限界と、王充の自己矛盾とを指摘することによつて論が進められてきた。しかるに私は以上の見地に立脚して、その「命定論」は、王充の批判そのものの中にその根底が存在すると共に、また「命定論」の存在は、王充の批判の性格を積極的に表示するものであると考えるのである。

本稿の論述過程は、まず社會的處遇關係にみつめた人間の「命」と「性」の關係より、その本質が人間の存在要因としての「命」「性」と、それが社會的處遇關係の結果として具現する「遭・遇・幸・偶」及び「性行」から切りはなさるべき所に批判が加えられた姿を見、次に人間存在の要因としての「命」「性」を、人間の生成過程と存在位置より見て、そこに「自然」を主體とする「偶然」「必然」の關係を明らかにし、もつて王充の「命論」「性論」が、存在としての原則に規定する「人間論」であると結論した。而して再び王充の批判態度を検討し、そこに王充の合理論と批判態度とが全く

同時的であり、從つて王充の「命論」「性論」が、批判より演繹される合理論であると同時に、その合理論が、批判を支える根底思想ともなるものであることを指摘して、ここに王充「命論」「性論」の八論衡に於ける位置をあきらかにし、而して本稿の目的をここに盡さんとしたのである。

○趙樹理文學研究

作 山 好 郎

○柳 永 研究

木 村 周 治

○聞一多とその詩

和 田 浩 浩

○黃州における蘇東坡の文學について

河 西 紀 雄

○中庸における誠の研究

濱 口 武 生

○樂府における李白

鈴 木 英 紗 子